

実践報告

**COVID-19 流行下における基礎看護学実習の自己評価
－臨地実習群と代替実習群の比較－**

奥平寛奈，高瀬寛子，柿谷絵理

根岸哲也，中根洋子，草刈由美子

大東文化大学 スポーツ・健康科学部 看護学科

抄 録

2021 年度 A 大学看護学科 2 年生の基礎看護学実習は COVID-19 の影響を受け、臨地実習を経験できた学生とできなかった学生に分かれた。このため本研究は、臨地実習と代替実習という実習形態の違いによる学生の学びについて考察し、今後の看護基礎教育における基礎資料とすることを目的とした。オプトアウトを経て同意を得た学生の実習終了後アンケートについて分析した。

結果、93 名（92.1%）から回答が得られ、内訳は臨地実習 41 名（44.1%）、代替実習 52 名（55.9%）であった。臨地実習と代替実習では、看護技術に関する項目について統計的有意差が認められ、臨地実習を経験した学生の方が代替実習を行った学生に比べて自己評価が低いという結果となった。

実際の患者と患者に見立てたシミュレーターでは、学生の看護援助の実践における困難感が異なるということが示唆され、臨地実習の意義と必要性を再認識した。

キーワード：基礎看護学実習，臨地実習，実習代替，シミュレーション，
COVID-19

I. 背景

看護学教育において臨地実習は、学生の基礎的な看護実践能力の修得に不可欠な授業であり¹⁾、看護学生は、学内の講義で学んだ知識と技術を演習で実践することで学びを深め、さらに臨地実習で実際の患者に実践することで既習の知識と技術の統合を図り、看護実践能力を習得していく。

2019年末から世界中で流行している COVID-19 の影響により、看護教育は大きな影響を受け、これまで当たり前に行っていた臨地実習の中止を余儀なくされた。2020年度における日本看護系大学協議会の調査によると²⁾、2020年9月以降開校予定の実習科目のうち 83.4%が臨地実習の変更有りと回答していた。A大学においても2年生の基礎看護実習は、2020年度は完全オンラインによる代替実習を行った³⁾。2021年度は実習期間を短縮した臨地実習を行うことで調整していたが、実習開始直前に発令された緊急事態宣言により一部の実習病院の受け入れが中止となり、臨地実習を経験できた学生（以下、臨地実習群とする）とできなかった学生（以下、代替実習群とする）に分かれる結果となった。学生にとって臨地実習は、“病院”という日常生活とは異なる環境への適応をしながら、既習の看護の知識と技術を使って実際に患者にケアを行うというこれまでに経験のない緊張感を持つ体験の場となる。また、臨床指導者や教員への報告・相談やグループメンバーである学生間の関係を円滑にするためのコミュニケーションなど、様々な実体験を通して己の未熟さと向き合い、今後の学修への向き合い方を再確認する貴重な機会であると考えている。

そこで、本研究では、学生が実習終了後に行った実習目標に対する自己評価についてのアンケートを分析することで、実習形態の違いによる学生の学びを考察した。

II. 目的

実習形態の違いによる学生の学びを考察し、今後の看護基礎教育における基礎資料とすることを目的とした。

Ⅲ. 用語の操作的定義

1. 臨地実習

本論文では、患者を初めて受け持ち看護過程の展開を行う 2 年次における臨地実習のことである。学生は受け持ち患者の看護計画を立案し、立案した看護計画を受け持ち患者に実践することが実習目的である。

2. 代替実習

本論文では、臨地実習を模して行う学内実習のことである。実習目的、実習目標に応じた架空の患者を設計し、その患者に整合する看護記録、検査データなどを電子カルテに見立てたパソコンに準備する等、臨地実習を行っている状況を模して展開する実習のことである。学生は受け持ち患者（架空の患者）の看護計画を立案し、立案した看護計画を受け持ち患者に見立てたシミュレーターで実践することが実習目的である。

Ⅳ. 方法

1. 対象

A 大学看護学科 2 年生基礎看護学実習履修者 101 名。

2. 実習内容および実習期間

実習形態と内容を図 1 に示す。臨地実習を含む形態は、オリエンテーション 2 日間、動画教材による学習 2 日間、臨地実習 2 日間、学内シミュレーション 3 日間、記録の整理 1 日間の合計 10 日間であった。代替実習を含む形態は、臨地実習の 2 日間を代替実習 2 日間に変更した。

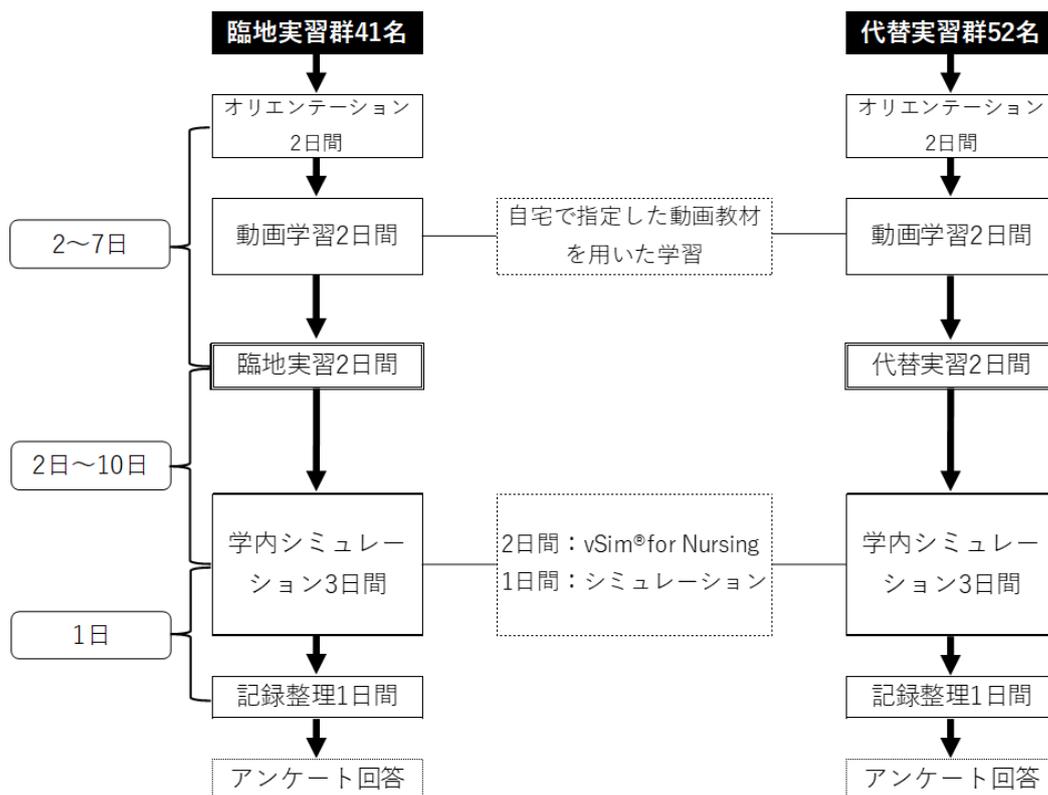


図 1 実習形態と内容

動画教材による学習目標は、動画教材に登場する患者の状態を正確に理解し、患者の訴えを把握できること、患者の訴えに対して行われている看護援助を把握できること、これらを通して看護について考察することに設定した。教材はナーシングチャンネル⁴⁾の【基礎看護 臨床判断 気づくトレーニング第1巻基礎看護学実習動画(約40分)】を用いた。学生は動画を視聴し、患者情報(患者の状態)、患者の状況(訴え)、援助内容(訴えに対する看護ケア・援助)についてとケースから学んだことを著者が自作した記録用紙に整理した。3人の患者のケースを2日間かけて学習した。

学内シミュレーションの学習目標は、事例患者の状態を把握することができる、事例患者の状態変化に気が付きケアプランを記述することができる、臨床判断を行う際のクリティカルシンキングを実践できることに設定し、vSim®for Nursing⁵⁾を用いて行った。事例は肺炎の診断で入院している患者が息切れを訴

え、歩行後に酸素飽和度が低下しているところからスタートする患者を活用した。vSim[®]for Nursing は、看護実践の場面がバーチャル世界で再現され、かつ双方向性のあるシミュレーション教材である。学生は映像の患者を観察しながら自分で考えたケアを選択することで情報が得られたり、学生の選択した行動により患者の容態が変化したりする。学生のレディネスを考慮し、著者が自作した記録用紙を用いて学習を進めた。1日目は事例患者の理解のために必要な情報の整理、患者の観察と評価のための基礎知識を学習した。2日目は1日目に学習した内容を基に実際に vSim[®]for Nursing を使用しながら事例患者の観察と評価を行った。観察と評価の一部を実際に学内の演習室に準備したシミュレーターを用いて行った。

臨地実習の目標は、学習者としての身だしなみを整え行動ができること、受け持ち患者の情報収集ができること、受け持ち患者の未充足のニーズに気が付きニーズに対する必要な援助を記述することができること、バイタルサインを正しく測定できること、清潔に関する援助を体験することに設定した。2日間という短い期間になったため、記録用紙を工夫して焦点を絞って患者情報を収集し、必要な援助を考えて実践できるようにした。

代替実習の目標は臨地実習の目標と同様であるが、模擬患者を設定して行った。学内の演習室を病室に見立て、教員が病棟師長に扮した病棟オリエンテーションの動画を作成して供覧させることで学習環境の工夫をした。模擬患者は呼吸器疾患を抱え自宅酸素療法中の患者が心不全の悪化により緊急入院した事例にし、労作時呼吸苦がある患者の日常生活の援助が考えられるようにした。その際、実際の呼吸器患者の映像を供覧させ患者のイメージを膨らませる工夫をした。また、臨地実習で目にするようになる電子カルテシステムに搭載されている体温表、看護記録、医師記録、処方箋についても実習期間分作成し、紙媒体で実習日毎に配布した。個人情報の取り扱いは臨地実習と同様に指導した。さらに、臨地実習で受け持ち患者に行うバイタルサイン測定と清潔に関する援助はシミュレーターを模擬患者に見立てて実践した。指導教員には学生個別の

状況を見ながらバイタルサインの値やその他の情報を適宜変化させることを依頼し、同じ疾患の患者であっても個別のアセスメントができる工夫を行った。

実習終了後に著者らが自作したアンケートへの回答を求めた。アンケート内容を表 1 に示す。実習形態の選択及び実習目標に対する自己評価で 5 段階のリッカート尺度【1. 全くできなかった 2. どちらかというところできなかった 3. どちらともいえない 4. どちらかというところできた 5. 十分できた】で回答するものとした。アンケートは、必要に応じた個別フォローを目的としたため、記名式で個人が特定できる形で A 大学が採用している LMS (Learning Management System) である manaba⁶⁾ のアンケート機能を活用した。その際、回答内容は科目の成績評価と一切関係がないこと、回答は自由意思に基づき回答したくない者は回答しなくてよいこと、得られたデータは個人が特定できないようにして実習報告会など学内外で公表する可能性があること、これらについては回答をもって同意とみなすことを口頭とアンケートフォーマット上で説明した。

実習開始からアンケートの回答終了までの期間は 2021 年 8 月中旬～9 月末であった。

3. 調査内容および調査期間

倫理審査承認後、対象者へ以下の①～④の内容を含んだ説明文章を学生が教員や事務職員からのお知らせを受け取るために使用するポータルを用いて周知した。周知は本研究に関係のない事務職員が行った。調査期間は 2022 年 8 月末であった。

①基礎実習終了後に行った実習における自分自身の自己評価についてのアンケートとループリックの実習内容毎の得点を本研究のために活用させていただきたいこと。②基礎実習の成績評価は確定していること。③本研究への参加に不同意の場合はその旨の連絡をしていただくことで除外すること。④連絡がない場合は本研究に同意したものとみなすこと。

なお、ループリックの実習内容ごとの得点は、【動画学習 12 点満点，学内シミュレーション 30 点満点，臨地実習又は代替実習（以下，実習とする）48 点満点】であった。

表 1 アンケート内容

【実習場所】

1. A (代替実習) 2. B (臨地実習)

【臨地実習又は代替実習について：2日間】

- 問1 実習全体を通して、「患者の状態を把握し、患者の未充足のニーズに気が付き必要な援助を考えること」はどうでしたか
 問2 「学習者（看護実習生）として適切に身だしなみを整え、行動することができた」はどうでしたか
 問3 「受け持ち患者の情報収集を適切に行い記述すること」はどうでしたか
 問4 「受け持ち患者の未充足のニーズに気が付き、記述すること」はどうでしたか
 問5 「受け持ち患者の未充足のニーズに対して必要な援助を記述すること」はどうでしたか
 問6 「バイタルサインを正しく測定すること」はどうでしたか
 問7 「清潔援助を指導者（もしくは教員）と共に実施（体験）すること」はどうでしたか

【動画教材での学習について：3日間】

- 問8 「患者の状態を理解し記述すること」はどうでしたか
 問9 「患者の訴え（情報）を理解し記述すること」はどうでしたか
 問10 「患者に対する援助内容について理解し記述すること」はどうでしたか
 問11 「動画教材での学習を通し自分の学びを整理し記述すること」はどうでしたか

【学内シミュレーションについて：3日間】

- 問12 「事例患者の状態を把握すること」はどうでしたか
 問13 「事例患者の状態変化に気が付き、ケアプランを考える（記述すること）はどうでしたか
 問14 「シミュレーションを通して、クリティカルシンキングを実践すること」はどうでしたか

4. 分析方法

臨地実習群と代替実習群の 2 群に分け，2 群間比較を行った． Shapiro-Wilk 検定を行い，正規分布をとらないデータの確認を行った上で Mann-Whitney の U 検定を行った． 全ての有意水準は 5% とした． 解析には IBM SPSS Statistics Version26.0 を使用した．

5. 倫理的配慮

大東文化大学人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理審査に申請し承認を得た（判定番号：DHR22-011）．

調査内容に関わる科目の評価は確定しており，本研究参加の同意の有無にかかわらずその評価が変更されることはないこと，得られたデータは，個人が特定されないように匿名化加工をしてパスワード付きの USB に保存すること，データを保存した USB は，著者の大学研究室内施錠可能な引出しで保管するこ

と、さらに、研究終了後に電子媒体の中身の完全削除と分析過程で印刷した紙媒体のデータについてはシュレッダーにかけることをオプトアウトの際の文章に明記した。

V. 結果

1. 対象者概要

対象者は A 大学の 1 年次に行われている病院の見学実習が COVID-19 の感染拡大の影響で全員実施できていない状況であった。学習状況のレディネス概要は、看護専門基礎科目としては人体の構造と機能や疾病と治療についての学習が進行中であった。看護専門科目としては看護師の基本的な技術である日常生活に関する援助技術やフィジカルアセスメントについては履修済みであった。

対象者 101 名のうち実習後のアンケートに回答を得られたのは 93 名で、回答率は 92.1%であった。これら全員から同意を得た。93 名の内訳は、臨地実習群 41 名 (44.1%)、代替実習群 52 名 (55.9%) であった。

2. ルーブリックの実習内容ごとの得点

結果を表 2 に示す。動画学習、学内シミュレーション、実習の全ての得点は臨地実習群と代替実習群で統計的有意差は認められなかった。

表 2 ルーブリック得点

	満点 (点)	全体			臨地実習群			代替実習群			Mann-Whitney検定 P値
		平均値±標準偏差	中央値 (第1四分位, 第3四分位)	中央値 (第1四分位, 第3四分位)	平均値±標準偏差	中央値 (第1四分位, 第3四分位)	中央値 (第1四分位, 第3四分位)	平均値±標準偏差	中央値 (第1四分位, 第3四分位)	中央値 (第1四分位, 第3四分位)	
動画学習	42	11.4±1.2	12(11, 12)	12 (12, 12)	11.3±1.6	12 (12, 12)	11.5±0.9	12 (11, 12)	12 (11, 12)	.62	
学内シミュレーション	30	28.1±2.8	30 (25, 30)	30 (25, 30)	28.3±2.6	30 (25, 30)	28.0±3.0	30 (25, 30)	30 (25, 30)	.70	
実習	48	42.3±5.6	44 (39.5, 46)	44 (41, 46)	42.8±5.0	44 (41, 46)	41.9±6.0	43 (39, 47)	43 (39, 47)	.65	

3. 学生による学習目標に対する自己評価

結果を表3に示す。動画学習、学内シミュレーションの全ての項目においては2群間比較による統計的有意差は認められなかった。

実習のうち2つの項目で統計的有意差が認められた。それらは「問6バイタルサインを正しく測定すること」と「問7清潔援助を指導者と共に実施すること」であった。いずれの項目も臨地実習群の方が代替実習群よりも自己評価が低いという結果となった。

表 3 学生自己評価

項目	実習後アンケート問題番号	全体			臨地実習群			代替実習群			Mann-Whitney検定 P値
		平均値±標準偏差	中央値 (第1四分位, 第3四分位)	中央値 (第1四分位, 第3四分位)	平均値±標準偏差	中央値 (第1四分位, 第3四分位)	中央値 (第1四分位, 第3四分位)	平均値±標準偏差	中央値 (第1四分位, 第3四分位)	中央値 (第1四分位, 第3四分位)	
患者の状態を理解し記述すること	8	4.4±0.6	4 (4, 5)	4 (4, 5)	4.3±0.6	4 (4, 5)	4 (4, 5)	4.4±0.6	4 (4, 5)	4 (4, 5)	.57
患者の訴えを理解し記述すること	9	4.3±0.6	4 (4, 5)	4 (4, 5)	4.3±0.6	4 (4, 5)	4 (4, 5)	4.4±0.6	4 (4, 5)	4 (4, 5)	.64
患者に対する援助内容について理解し記述すること	10	4.3±0.6	4 (4, 5)	4 (4, 5)	4.3±0.6	4 (4, 5)	4 (4, 5)	4.4±0.5	4 (4, 5)	4 (4, 5)	.51
動画教材での学習を通じ自分の学びを整理し記述すること	11	4.4±0.7	5 (4, 5)	5 (4, 5)	4.4±0.6	4 (4, 5)	4 (4, 5)	4.4±0.7	5 (4, 5)	5 (4, 5)	.90
学内シミュレーション	12	4.3±0.6	4 (4, 5)	4 (4, 5)	4.3±0.6	4 (4, 5)	4 (4, 5)	4.3±0.6	4 (4, 5)	4 (4, 5)	.70
事例患者の状態変化に気が付きケアプランを記述すること	13	4.1±0.7	4 (4, 4.5)	4 (4, 4.5)	4.2±0.7	4 (4, 5)	4 (4, 4)	4.0±0.6	4 (4, 4)	4 (4, 4)	.28
シミュレーションを通してクリティカルシンキングを实践すること	14	3.9±0.8	4 (4, 4)	4 (4, 4)	3.8±0.9	4 (4, 4)	4 (4, 4)	4.0±0.8	4 (4, 4.5)	4 (4, 4.5)	.26
患者の状態を把握し、患者の未充足のニーズに気が付き必要な援助を考へること	1	4.0±0.6	4 (4, 4)	4 (4, 4)	3.9±0.6	4 (4, 4)	4 (4, 4)	4.1±0.5	4 (4, 4)	4 (4, 4)	.16
学習者（看護実習生）として適切に身だしなみを整え、行動すること	2	4.8±0.5	5 (5, 5)	5 (5, 5)	4.8±0.6	5 (5, 5)	5 (5, 5)	4.8±0.4	5 (5, 5)	5 (5, 5)	.18
受け持ち患者の情報収集を適切に行い記述すること	3	4.2±0.7	4 (4, 5)	4 (4, 5)	4.2±0.8	4 (4, 5)	4 (4, 5)	4.2±0.7	4 (4, 5)	4 (4, 5)	.96
実習受け持ち患者の未充足のニーズに気が付き、記述すること	4	4.0±0.7	4 (4, 4)	4 (4, 4)	3.9±0.6	4 (4, 4)	4 (4, 4)	4.0±0.6	4 (4, 4)	4 (4, 4)	.81
受け持ち患者の未充足のニーズに対して必要な援助を記述すること	5	4.0±0.7	4 (4, 4)	4 (4, 4)	3.9±0.6	4 (4, 4)	4 (4, 4)	4.1±0.6	4 (4, 4)	4 (4, 4)	.23
バイタルサインを正しく測定すること	6	3.8±0.9	4 (3, 4)	4 (3, 4)	3.4±1.0	3 (3, 4)	3 (3, 4)	4.1±0.8	4 (4, 5)	4 (4, 5)	<.001 *
清潔援助を指導者（もしくは教員）と共に実施（体験）すること	7	4.1±1.1	4 (3, 5)	4 (3, 5)	3.8±1.2	4 (3, 5)	4 (3, 5)	4.3±0.9	5 (4, 5)	5 (4, 5)	.03 *

参考までに回答結果分布を図 2, 図 3 に示す. 全体的に, 実習目標に対して十分にできた・どちらかというところできたと回答した者が多かった.

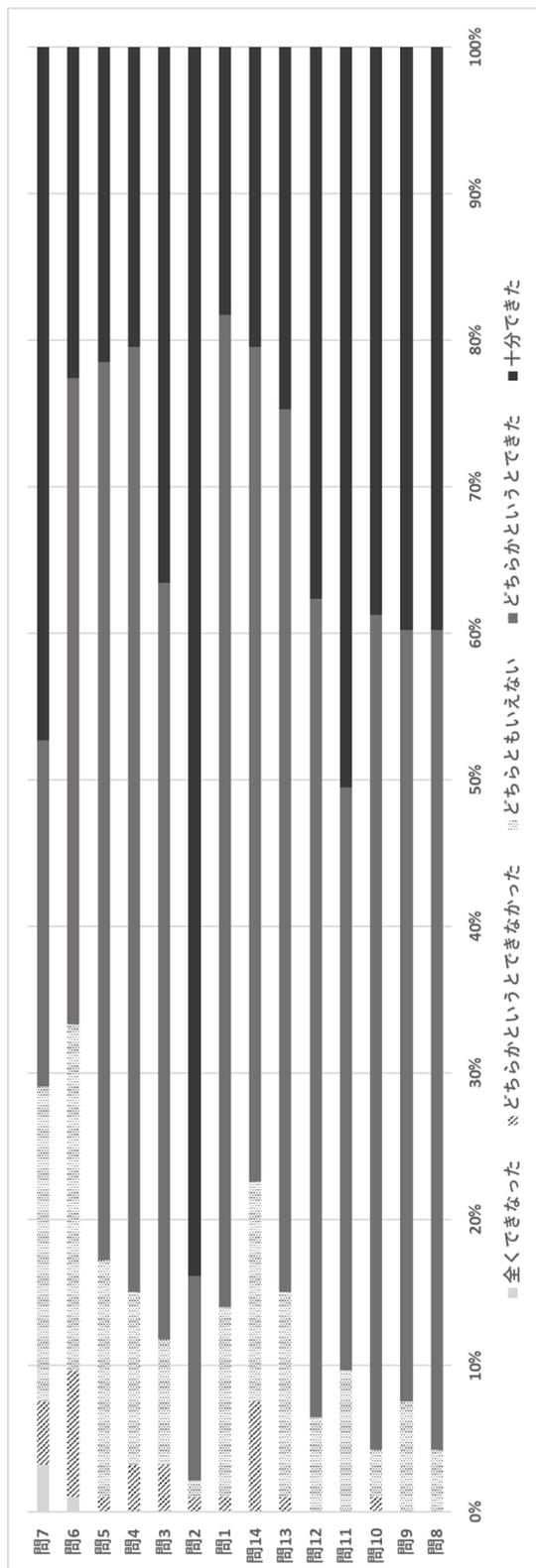


図 2 学生自己評価回答全体分布

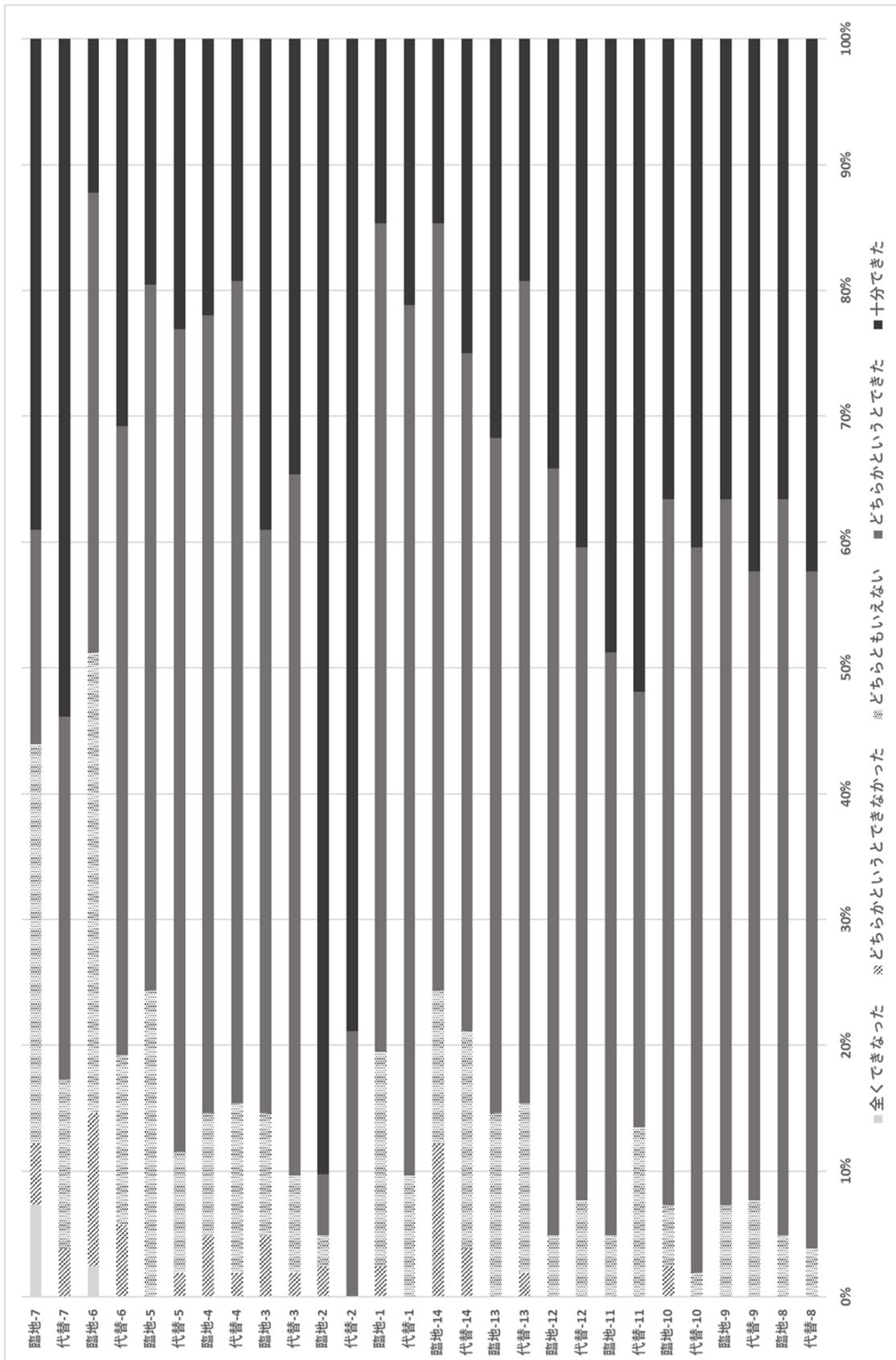


図 3 学生自己評価回答実習形態別分布

VI. 考察

臨地実習群と比較して代替実習群の方が看護技術に関する自己評価は高く、“できた”という認識を持っていた。この理由として2点考えた。

1 点目は実習環境である。臨地実習群は病院という初めての環境に短時間で適応しなくてはならない状況であり、不安と緊張は強かったと推測した。一方、代替実習群では大学の学内演習室という慣れた環境であり、指導者も日頃から接している教員であったため不安や緊張感は少なかったと考えられる。

2 点目は患者である。臨地実習群は実際の患者を受け持たせていただいた。挨拶一つにしても学生にとっては初めての経験であった。また、シミュレーターや学生同士で練習した時にはできていた看護援助であっても、実際の患者の場合は疾患や症状、治療による身体的制約や体格の違いなどを考慮する必要があった。一方、代替実習群では、患者の代わりにシミュレーターを活用した。実際の患者と違い身体的制約は無く常に同じ状態のため、慣れてくると比較的容易に看護援助を実践することができたと考えられた。

以上のことから、臨地実習とシミュレーター等を活用した代替実習では、学生の実体験に関係する事柄に関する自己評価の項目における統計的有意差が認められたものと考えられた。

中本ら⁷⁾は、基礎看護学実習と成人看護学実習を経験した学生への実習困難感を調査した研究において、両実習ともに最も困難感が高かったのは「看護・援助の実践」であったと述べており、本研究においても実際の患者と患者に見立てたシミュレーターでは、学生の看護援助の実践における困難感が異なるということが示唆された。実動⁸⁾はコロナの影響で臨地実習の代替で行った学内の基礎看護学実習において、学生は緊張感・臨場感を学ぶことができなかったと報告しており、著者も病棟オリエンテーションの動画を作成したり、演習室内を病室に見立てたりする工夫を行ったが、現実の臨場感には及ばなかったと考えられた。水上⁹⁾は看護学生が臨地実習で行う清拭の援助について、「今まで体験したことのない状況で清拭を行うこと」などに困難を感じていると報告

している。本研究における臨地実習群の学生たちも同様の思いを抱き、看護援助を実践することは難しかったと推測した。

COVID-19 の感染拡大は看護教育に様々な大きな影響を与えた。看護教育に対する思考の転換と柔軟な対応が求められ、教授法の再考をせざるを得ない事態となった。しかし、COVID-19 の感染拡大が社会的問題になったこの2年間は、臨地実習やそれに代わる演習などの取り組みがなされ、多領域の実践報告^{10)~12)}からは教材の工夫と学生の学びについて報告されていた。日本看護系大学協議会のCOVID-19に伴う看護学実習への影響調査の結果²⁾では、実習内容・方法の変更による知識・技術・態度に関する実習の到達目標は、臨地実習と同程度からそれ以上が、「知識」72.3%、「技術」24.3%、「態度」50.7%となっており、知識については臨地実習に行けなかった影響は大きくないと考えられた。一方、松本ら¹³⁾は「患者の反応を観察して臨機応変に対応することや患者との関係性の構築などについては課題が残る」としており、これは著者の研究³⁾結果とも一致する内容であった。これまで看護教育において臨地実習は当たり前に行うものと考えてきたが、コロナ禍で臨地実習に制約が生じたことにより臨地実習の意義と必要性を再認識した。

藤野¹⁴⁾はコロナ禍で看護基礎教育を受けてきた学生たちの特徴として、現場に身を置いた時間が限られてきたこと、個人の実習経験が様々でありそのことを不安に感じている学生が多い一方で、オンラインに強く、学内実習やシミュレーション教育で鍛えた思考力や判断力を身につけているという強みもあると述べている。これらの学生たちの特徴を臨床現場も理解しており、新人看護師の職場適応を促すために採用前インターンシップを行ったり¹⁵⁾、新人看護師のリアリティショックを防ぐために教育プログラムの再構築を行ったり¹⁶⁾している。看護学実習ガイドライン¹⁷⁾では、看護学実習は、学生、看護の対象となる人々、実習指導教員、実習指導者等によって成立する教授学習過程であり、大学と実習施設との連携と協働がその基盤となると示されている。コロナ禍で臨地実習に制約が生じた状況下では、これまで以上に臨地実習だけにとどまらず卒後教育においても大学と病院が連携を図っていくことも重要である。

阿部¹⁸⁾は、臨地実習の代替としてシミュレーションを活用する場合でも、代替で達成できる目標と実際の体験でなければ達成できない目標を教員や指導者が明確にして指導を計画していく必要があると述べており、看護大学教員としても科目設計、教材設計を十分に行い効果的な教授法を模索し続けていく必要があると考える。

VII. 本研究の限界と課題

今回の調査は A 大学看護学科 2 年生を対象としており、本研究結果がすぐに一般化できるものではない。コロナ禍で多くの看護系大学が制約を受けながら教育している状況であり、今後他施設との連携を図って継続調査していく必要がある。

VIII. 結論

実習形態の違いによる学生の学びについて考察した。実際の患者と患者に見立てたシミュレーターでは、学生の看護援助の実践における困難感が異なるということが示唆され、臨地実習の意義と必要性を再認識した。

本研究に関する開示すべき利益相反はない。

文献

- 1) 舟島なをみ監修 (2020) : 看護学教育における授業展開 (第 2 版), 205, 医学書院, 東京都
- 2) 一般社団法人日本看護系大学協議会 : 2020 年度 COVID-19 に伴う看護学実習への影響調査 A 調査・B 調査報告書, Retrieved from :
<https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2021/04/covid-19cyousaAB.pdf> (検索日 : 2022 年 6 月 24 日)

- 3) 奥平寛奈, 高瀬寛子, 柿谷絵理, 他 (2022): コロナ禍における実習代替えとしての模擬実習—基礎看護学実習での取り組み—, 大東文化大学看護学ジャーナル, 4 (1), 3-14
- 4) 株式会社 東京サウンド・プロダクション: ナーシングチャンネル, Retrieved from: <https://nur-ch.com/nursing-channel/> (検索日: 2022年6月27日)
- 5) Laerdal: vSim® for Nursing, Retrieved from: <https://laerdal.com/jp/products/courses-learning/virtual-simulation/vsim-for-nursing/> (検索日: 2022年6月27日)
- 6) 株式会社 朝日ネット: 教育支援サービス manaba, Retrieved from: <https://manaba.jp/> (検索日: 2022年6月27日)
- 7) 中本明世, 伊藤朗子, 山本純子, 他 (2015): 臨地実習における学生の困難感の特徴と実習状況による困難感の比較—基礎看護学実習と成人看護学実習の比較を通して—, 千里金蘭大学紀要, 12, 123-134
- 8) 実動基子 (2020): コロナ禍における基礎看護学実習の新たな実施方法と実習目的の達成, キャリアと看護研究, 10 (1): 14-20
- 9) 水上舞, 恩幣宏美, 中村美香 (2018): 看護学生が病院内で実施した清拭で感じた困難, 群馬保健学研究, 39: 105-111
- 10) 平塚久美子, 市原千里, 永井健太, 他 (2021): コロナ禍における公衆衛生看護学実習の試み, 東都大学紀要, 11 (1), 93-101
- 11) 大鳥和子, 鈴木由紀子, 駒井里枝, 他 (2020): コロナ禍における成人看護学実習 I (慢性期看護実習) ~臨床実習指導者と教員の協働による実習指導の取り組み~, 了徳寺大学紀要, 15, 39-47
- 12) 金井寿幸, 緒方あかね (2021): コロナ禍実習中止による母性看護学 Online 実習の取り組み~産褥母児の受け持ちから退院まで~, 大和大学研究紀要, 7, 27-28
- 13) 松本晃子, 西上あゆみ, 長井雅代, 他 (2020): 2020年度看護学科のコロナ禍における2年次基礎看護学実習実践報告, 藍野大学紀要, 33, 43-51

- 14) 藤野ユリ子 (2021): with/after コロナのシミュレーション教育の展望, 看護, 73(10), 54-69
- 15) 中村千夏子, 中元めぐみ, 原田久美子 (2022): 新人看護師の職場適応を促す採用前インターンシップ, Nursing BUSINESS, 16(3), 21-25
- 16) 佐藤千明 (2022): 臨地実習が制限された新卒に対する新たな教育プログラム, Nursing BUSINESS, 16(4), 36-42
- 17) 文部科学省 (2020): 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会第二次報告 看護学実習ガイドライン, Retrieved from:
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/098/gaiyou/mext_00260.html (検索日: 2022年6月27日)
- 18) 阿部幸恵 (2021): シミュレーション教育における VR 利用の可能性, 看護, 73(10), 78-81